

なごや街角今昔

【10】大曽根…伸びていく街

池田 誠一

1 名古屋東北部の交通拠点

大曽根は名古屋東北部の最大の拠点といえそうです。大曽根駅には、JR中央線、名鉄瀬戸線、地下鉄名城線のほかガイドウェイバスなどが集中し、その乗降客だけで1日10万人にのぼります。駅前には区画整理等の工事が進行中ですが、徐々に新しい市街地に生まれ変わり始めています。大曽根の街には、今大きな期待が寄せられています。

ところが、注意してみると大曽根という所は駅前ではありません。駅前は大曽根といひ、大曽根交差点はそこから西に600^{メートル}ほど行った商店街のはずれになります。江戸時代、城下5口の一つとされた大曽根口は、さらにそこから南に800^{メートル}ほど行った赤塚の近くで



図1 大曽根の中心は①江戸初、②明治末、そして③現代と動いてきた(太線は明治中頃の市域)

した。(図1) 大曽根という街はどんどん動いているようにもみえます。街が動き、変化していった背景には何があったのでしょうか。大曽根の街角に立ってその変遷を追ってみたいと思います。

2 大曽根の歴史

(1) 古い時代の大曽根

今の大曽根付近は、古代は山田郡に属して山田荘という荘園の中でした。その後武士の時代になってこの地域を治めたのは尾張源氏の流れの山田氏です。1221年の承久の変ではその主、山田重忠が活躍しました。山田郡は西区、北区、守山区、さらには尾張旭市、瀬戸市等にまたがる広い区域でしたが、どういふわけか戦国時代に愛智郡と春日井郡に分割されてなくなってしまっています。(図2)

江戸時代には、大曽根は信州へと続く善光



図2 山田郡の想定範囲

寺街道(下街道)が通り、大曽根口と呼ばれた大木戸が設けられて、城下の東部の出入口になりました。また大曽根はその先で瀬戸を結ぶ街道との分岐点にもなっていました。街道に沿って実質的な宿場が形成されていったため、江戸時代の終わり頃の大曽根は赤塚から今の大曽根交差点付近まで町屋が続いていたといえます。

(2) 明治の大曽根

明治になって、大曽根は多治見方面と瀬戸方面からの街道の交点として物資の集積の拠点になりました。とくに両地域で生産される陶磁器を港に結ぶ結節点として重要な位置を担うようになったのです。

ところが明治20年代後半に計画された中央鉄道(中央線)では、千種に駅が出来て大曽根に駅の計画はありませんでした。あわてた地元では周辺の町村を誘って大曽根駐車場の設置運動を始めました。鉄道側との折衝で、土地の提供を始め、盛土工事等の実施や瀬戸とを結ぶ交通機関の設置などの厳しい条件が出されました。しかし地元では苦労の末これらを解決し、開通から11年遅れはしましたが、明治44年に大曽根駅開設に漕ぎ付けたのです。瀬戸からの鉄道はその前の39年に開通し、同年にはお城の堀を通過して堀川と結ばれて陶磁器を船運に繋ぐルートもできました。大曽根は地元の努力で、鉄道の時代になっても多治見、瀬戸方面からの交通の拠点の地位を守ることが出来たのです。

(3) 行政の区域変更の中で

交通面では成果を取めた大曽根も、行政の区域変更には翻弄されることになりました。

江戸時代の大曽根村は、明治13年春日井郡が東西に分かれる時に、その街の大半が名古屋区に編入されてしまいました。大曽根村南部の坂上町、森下町、大曽根町、八軒町で、北部は大曽根村として残りました。大曽根は南北に分断されてしまったのです。21年の市町村制への移行の時には、大曽根村も名古屋市へと声がありましたが、村民の意向で実現せず、大曽根村は他の村と合併して六郷村になりました。南と北は別々の道を進み始めたのです。

しかし大正10年の名古屋市と周辺町村との大合併の時、六郷村は市に編入され、旧大曾



図3 大曽根土地区画整理事業。北区と東区にまたがって事業が進められている

根村は南部も北部も同じ東区になりました。そして昭和19年に北区が出来た時も、六郷村をはじめ旧大曽根村は東区に残ったのです。

ところが21年、学区の関係からか、六郷村は北区に属することになりました。再び南北に分かれたばかりか、こんどは大曽根駅が区の境になってしまったのです。大曽根の交差点は北区でしたが、大曽根駅は東区というまとまりにくい状況になりました。

第2次大戦では大曽根付近も大きな被害を受けました。他の地域では戦災復興が始まりましたが、大曽根地域は、戦災に遭わなかった地域も含めた大曽根全体の大掛かりな土地区画整理事業が実施されることになりました。(図3)そして大曽根の北側で新しい街づくりがスタートしたのです。

3 変遷の跡を追って

それでは、変遷の跡を街角の中に探してみよう。スタートは東区の赤塚、基幹バス



「大曽根口」のあった赤塚交差点の北方。正面が神明社

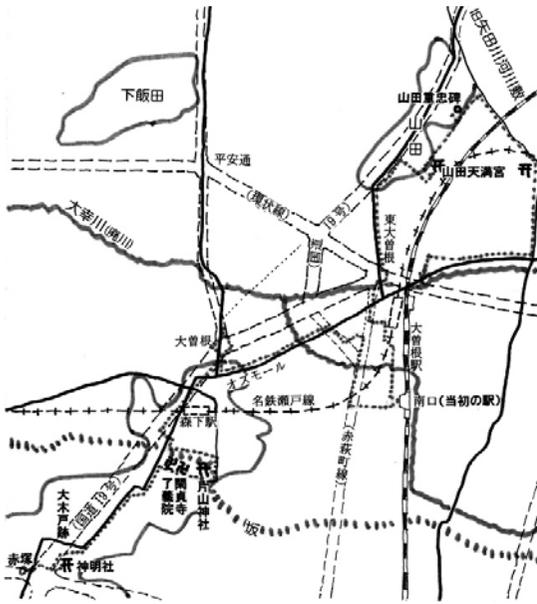


図4 明治中頃の大曾根付近(破線は現在、細い点線はルート)

新出来町線の東行の赤塚白壁停からにします。(図4)

赤塚の交差点は広い国道19号になりましたが、その東北角に道路拡幅で移動した神明社があります。神明社を出て1本北の道を右に入り、すぐ北に曲ります。この辺りから旧善光寺街道になり、江戸時代の大曾根口はその少し北、大きなマンションのある付近だったといいます。道は坂上町と言われた辺りを北に進みます。鍵の手になった道路を越えて北に進むと街道は坂を下り始めます。その手前の道を東に入るといくつかの寺社が並んでいます。

手前の了義院は、本堂の前に鳥居のあるお寺ですが、その右手に2つ石碑が並んでいます。これは三日月塚といい、1688年秋、芭蕉がここを訪れて、「有とあるたとえにも似ず



了義院の三日月塚。右はつなぎ合わされている



大曾根八幡宮ともいう片山神社

三日の月」と詠んだ所といいます。右側の碑は戦災で壊れて繋ぎ合わされたものです。了義院の向こうには、その書院が名古屋三景の一つとされた閑貞寺があります。また道の東奥は片山神社で、古い歴史をもち大曾根八幡宮ともいわれる神社です。境内の右奥の出口を出て左に曲り込むと崖が見え、大きな段差のある地形であることが分かります。閑貞寺はこのために北向きの景色が良かったのでしよう。西に進むと街道に戻ります。

街道は北にすぐ突き当たり、左に曲ると広い国道に出ます。名鉄瀬戸線をくぐると大曾根交差点になります。明治の中頃までは商店はこの付近までだったようですが、今はここが商店街の始まりになっています。少し交差点を回ってみます。西の道は映画館などのあったすらん通という賑やかな所でした。北の道に入ると右側の2本目にまっすぐ東北にのびる道があります。この道は古い街道だといわれます。

さて、街道は交差点のすぐ南を東に進む道です。駅までの道の西半分は早く近代化が進み「オズモール」という商店街になりました。車を規制し、三角屋根が共通のデザインです。しゃれた商店街を通り過ぎると広い道路の予定地になり、その先は区画整理中です。

その道路予定地を右に2本行って左の細い道に入ります。すぐ左に小さなお堂があり、その右手前に石碑が立っています。「いみたみち」(飯田道)と読め、向こうには善光寺道とあります。この道標は、元々善光寺街道と瀬戸を経て信州飯田への瀬戸街道の追分、今の駅西広場の中にありましたが、工事で移転されたものです。東に出て広い道を南に、瀬戸線をくぐって



大曾根商店街近代化のさががけとなった「オズモール」

一つ目の信号を渡ります。東に進むと突き当たりはJR駅の南口です。ここが**当初の大曾根駅**でした。私鉄の駅は街道に近い所(ほぼ現駅位置)、国鉄の駅は当時の大曾根の町に近い所(南口)と離れたのでしょうか。駅前の道を北に、再び名鉄線をくぐって進むと工事中の駅西広場に出ます。工事を迂回しながら広場の北、5差路の**東大曾根交差点**に出ます。



「右 いるたみち」と読める道標



幼稚園の中にある山田重忠の碑

ここは、戦後「大曾根の6差路」といわれ、国道19号線と環状線、それに名鉄線もが平面で交差する大変な交差点でした。今は、西の道は閉鎖、国道は西に移設、名鉄は高架化、それに道路も拡幅と、見違えるほどすっきりしました。

交差点北側の道に入ります。旧国道ですが今ではそのイメージはありません。しばらく行くと広い国道に出ます。右に国道を1本行き右に曲ると、線路の手前に**山田天満宮**があります。二代藩主光友が藩学問祈願所として建てました。境内に合祀された金神社の横の門から出て右に進みます。少し行くと左に幼稚園があり、運動場の中にこんもりした茂みがあります。廣福寺で、入口には**山田重忠旧里**とあり、ここは名古屋の東北部を支配していた**山田荘の館**があった所とされています。北に行くと信号のある通に出ますが、ここは古い矢田川の堤防跡でした。右に、JR線をくぐり、信号を右折すると**白山神社**があり、そのまま南に進むと2つ目の信号が**瀬戸街道**の旧道になります。右に入り線路の手前を左に曲ると大曾根駅に出ます。



JR大曾根駅南口。当所の駅はここにあった

4 区境を越えた街づくり

街が動くのは時代の流れと言えます。江戸時代の初めには城下のはずれの赤塚付近が街の出口の大曾根口でした。その後街道に沿って街が北に伸び、明治の頃には今の**大曾根交差点**の付近まで達しました。そして、今ではその先の大曾根駅に人々が集まり、駅前が街の中心へと動き始めています。これからは駅が中心になって大曾根という街が出来そうです。

その面で心配なのは行政区画です。これまでの区域のゴタゴタは、よく見ると大曾根という地域の取り合いのようにも見えます。はじめは名古屋市と春日井郡でもめて、結局は大曾根を南北に分断してしまいました。その後は東区と北区との間です。今度は駅前が境界になってしまいました。行政区の境目は普通でも商店街や住民組織が別になるため、街を一体的にまとめることが難しくなります。これから中心にならなければいけない駅前がその境目になったことは大きな問題でした。

しかし、それをひとつにまとめている仕組みがありました。区画整理事業です。大曾根駅を中心に東区と北区を含んだ区域をひとまとめにして、街づくりが進められているのです。スケールの大きな街になるには行政の区域を超越することが必要です。大曾根の街が名古屋の東北部の真の拠点になるかどうかは、区画整理が終わった後も、区の区域を越えた街づくりを進められるかどうかにかかっているのかもしれない。

〈主な参考文献〉

- ①水野時二監修「北区誌」(1994、北区制50周年記念事業実行委員会)
- ②東区史編纂委員会「東区史」(1973、東区総合庁舎建設後援会)
- ③沢井鈴一他「北区 歴史と文化探索トリップ」(2004、名古屋北LC)